

いわゆる“対象のガ格”の正体を求めて

認知文法の観点から *

尾谷昌則

0. はじめに

格(case)の問題に関しては、これまで多くの議論が重ねられてきた。一つの格標識(case marker¹⁾)が必ずしも一つの意味に対応していないという事実が、多くの研究者の関心を集めてきた。ガ格といえはまず最初に思い浮かぶのは当然(1)のような主語の例であろうが、例えば(2)に挙げるように、単純に主語とは呼べない例も数多く存在する。

- (1) a. 太郎が次郎を殴った。
b. あそこに綺麗な花が咲いている。
- (2) a. 海が見える / 音が聴こえる / 足が痛い。
b. 寿司が食べたい。
c. あいつが {好きだ / 嫌いだ / 恐い}。
d. 英語が話せる。

例文(1)では、それぞれ「太郎」「綺麗な花」が主語となっていることに疑問の余地はないであろう。しかし、例えば(2a.)に挙げた例文では、目で対象を認識するという動作をするのは「海」ではなく、省略されている話者であり、「海が」はその動作の対象となるべきものである。(2b.,c.,d.)においても同様である。本稿ではこのガ格の用法(以下、「対象のガ格」と呼ぶ)について認知文法の立場から統一的な説明を試みるものである。

1. 先行研究

先行研究は主に以下の三つに大別される。時枝(1950)は、例文(2)のようなガ格に対して「対象語」と呼んで新しい範疇を設けている。しかし橋本(1969)は「主語」、久野(1973)や柴谷(1978)は「目的語」とであると論じているように、見解は一致していない。

対象語 (時枝 1950)

主語 (橋本 1969)

目的語 (久野 1973, 柴谷 1978)

このように、議論が完全に分かれている要因はいくつか考えられるが、特に重要なのは二つであるように思われる。1つは、文法格 / 意味格 / 文法関係の三つの混同である²。「文法格」とは「が」「を」「に」のような表層格のことであり、「意味格」は動作主、被動作主、経験者のようなものであり、いわゆる意味役割と等しい概念である。そして最後の「文法関係」というのは、主語、直接目的語、間接目的語などである。例えば次の(3)では、文頭の名詞句「太郎」はガ格で、動作主で、主語である。しかし例文(4)では、ガ格の「背後霊」は動作主でもなければ、主語と呼ぶにも抵抗がある。

- (3) 太郎が次郎を殴った。

(4) 太郎には背後霊が見える。

このように、同一の表層格でも、異なる意味格、異なる文法関係を持つことがある。格の問題を論じる際の最大の問題は、表層格 / 意味格 / 文法関係の三つが必ずしも一対一に対応しているわけではないので、これらをどのように対応づけるかに尽きる言っても過言ではない。結論から先に言えば、時枝(1950)、久野(1973)、柴谷(1978)らの分析は意味格を優先した結果であり、橋本(1969)は表層格を優先した結果であるといえる。久野(1973)では、(2)のようなガ格を目的語であるとする積極的な根拠は示されていないが、柴谷(1978)では、その根拠として目的語をマークする「を」と交替可能であることを指摘している。しかし例文(5b.)は(5a.)に比べて容認度が少し落ちる上に、(6b.)のような反例にも事欠かない³。意味格としては、どちらも動作の対象であるから同じはずであるのに、同じ表層格でマークすることができないのである。このことは、意味格という観点だけでガ格の問題が解決できないことを示唆している⁴。

(5) a. 太郎は花子が好きだ。

b. ? 太郎は花子を好きだ。

(6) a. 太郎には背後霊が見える。

b. *太郎には背後霊が見える。

二つ目の問題は、一つ目の問題とも大いに関係するのだが、「主語」の定義の曖昧さである。久野(1973)や柴谷(1978)は、主語の定義として統語的な特性を重視している。ゆえに、主語と同じ統語的振る舞いをしない対象のガ格は、主語ではないと結論付けている。主語の主な特徴としては、杉本(1986: 271)が以下のようなものを挙げている⁵。

文頭にある

再帰名詞の先行詞になる

「が」でマークされる

同一名詞句消去の標的になる

尊敬語化を誘発する

数量詞遊離を許す

文頭にあるという考えは、多分に英語からの影響を受けたものであるため、日本語にも適用できるかどうかは疑わしい。「が」でマークされるという基準も循環論に陥るので不適當である。数量詞の遊離に関しては、主語だけでなく直接目的語の場合も起きるので、どちらとも決められない。尊敬語化に関しては、たしかに対象のガ格は尊敬語化を誘発しない。これは以下の例文(7)からも明らかである。「お好きだ」による尊敬の念は、目的語の「山田先生」ではなく主語の「私の息子」に向けられているとしか解釈できないので、(7)が非文となってしまう。⁶

(7) *私の息子は山田先生がお好きだ。

しかし、尊敬語化を誘発するのは文法関係としての「主語」ではなく、意味格としての「動作主」なのである。その動作を行う主体に対して尊敬の念を表すために、尊敬語は動詞の一部として実現するのであり、動作の対象に対して尊敬の念を表すためではない。ゆえに、尊敬語化を誘発するかどうかの議論は、動作主を認定する際の基準として用いることはできても、主語を認定する際に用いることはできない。⁷ ゆえに柴谷(1978)らの議論は、文法関係としての主語と意味格としての動作主を混同しており、つまりは主語の定義が曖昧なのである。^{8,9}

2. 認知レベルでの説明に向けて

2.1. trajector & landmark

3節で本稿の分析を述べる前に、2節で認知文法(Langacker 1987, 1991, 1993)の中核をなす概念について簡単に触れておく。まずは trajector(tr.)と landmark(lm.)についてであるが、これはそれぞれゲシュタルト心理学でいうところの「図(figure)」と「地(ground)」に相当する概念である。ある状況の中で一番際立っている「図」として認知されている参加者が tr.であり、それ以外の参加者は全て「地」、つまり lm.と解釈される。定義を以下に引用しておく。¹⁰

Trajector (tr.) : “The primary figure within a profiled relation”(Langacker 1991: 555)

Landmark(lm.): “A salient structure other than the trajector of a relational predication or the profile of a nominal predication.” (Langacker1987: 490)

例文(8)は、客観的には同じ状況を言語化した結果であるが、(8a.)では Tom がその状況の認知の中心参加者、つまり tr.として認知されたことが反映された文であり、(8b.)では、John が tr.として認知された結果である。このような状況認知の違いは、例文(9)において如実に現れる。tr.と lm.を反転させても客観的な意味は変わらないのだが、その状況に対する話者の異なる把握(copnstrual)のストラテジーが反映されている。

- (8) a. Tom killed John.
b. John was killed by Tom.
- (9) a. まだ半分残っている。
b. もう半分なくなってしまった。 (山梨 1995)

2.2. 参照点(Reference Point)

参照点(Reference Point)とは、ある標的(target: ターゲット)にメンタルコンタクトをとるために経由する対象のことであり、Langacker(1993)では以下のように述べられており、図1のようなスキーマで表記している。

“... [reference point] is best described as the ability to invoke the conception of one entity for purpose of establishing mental contact with another, i.e., to single it out individual conscious awareness. ... For example, I deliberately use a perceptual reference point when I locate the North Star by mentally tracing a path along the end of the Big Dipper.” (Langacker 1993: 5)

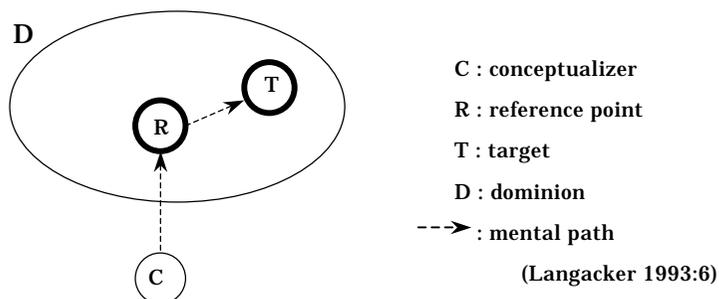


図 1

参照点は、標的（ターゲット）を認知する際の手掛かりとなるものであるから、まず参照点自体が認知しやすくなければならない。¹¹ また下の(10b.)の容認度が少し落ちる原因は、場所を同定するための場合には、動かず、大きく、安定したものの方が参照点としてふさわしいのに、そうではない *bike* が参照点として用いられているからである。

(10) a. There is a bike near the house.

b. ?There is a house near the bike.

Talmy(1978)

2.3. 認知レベルの意味について

英語の *of* の意味を学習辞典などで調べてみると、「所有」「所属」「起源」「分離」などの意味が列挙されているが、これらは全て何かを同定する際の「認知の手掛かり」になりやすい事例を列挙しているだけである。中村(1997)では、このようなプロトタイプ事例の意味だけでは *of* の意味記述としては不十分であり、それらの事例の意味とは別に認知プロセス（スキーマの意味）を追求する必要性が論じられており、*of* のそれが < 認知的手掛かり >、つまり < 参照点のマーカ― > であるとされている。¹²

of のスキーマの意味 ----- 「認知的手掛かり」

of のプロトタイプ事例の意味 ----- 「所有」「所属」「起源」「分離」など

よって、*of* の「所有」や「所属」といった意味は、認知の手掛かりをマークするという抽象的なスキーマ意味から具現化されたプロトタイプ事例的な意味として位置づけられる。この関係は図2のように表される。プロトタイプ事例や様々な拡張事例を抽象化したものがスキーマであり、その抽象的なスキーマを具現化したものがプロトタイプ意味である。非プロトタイプ的な拡張事例（もしくは周辺事例）は、プロトタイプからの拡張であると同時に、スキーマを具体化したものとして位置づけられる。¹³ 本稿においても、このような視点からガ格の問題を論じるものである。

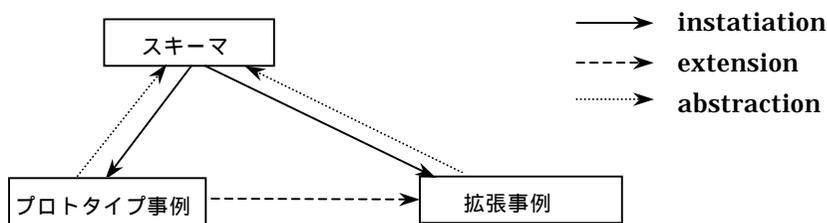


図2

3. 対象のガ格について 認知文法の観点から

3.1. ガ格のスキーマの意味とプロトタイプの意味

さて、それではガ格の問題について論じることにしよう。ガ格の機能を十分に分析するためには、意味格や文法関係のような文法レベルの観点のみでは不十分であることは1節でも見たとおりである。そこで本稿では、Langacker(1987, 1991, 1993)や中村(1997, 1998)らが提案するような認知レベルの観点から、対象のガ格の機能について考察する。尾谷(1999)では、格助詞ハとガの機能について例文(11)のような事例を通じて、それら

のスキーマ意味を(12)のように論じている。

(11) A: 「この中には、学生が1人混じっています。」

B: 「学生(R)は誰(T/tr.)ですか？」

a. C: 「僕が学生です。」

「TがRです。」

b. C: * 「僕は学生です。」

× 「TはRです。」

c. C: 「学生は僕です。」

「RはTです。」

d. C: * 「学生が僕です。」

× 「RがTです。」

例文(11)のような会話においては、「学生は誰なのか？」ということが話題になっているのだから、会話の話題としての参照点が「学生」であり、その参照点からアクセスするターゲットが「誰」である。ゆえにそれに対する解答の部分(つまり「僕」)がターゲットであり、且つ *trajector* ということになる。八とガを使った解答は(11a.~d.)のように4通りの組み合わせが考えられるが、実際に可能なのは(11a.)と(11c.)のみであることから、八の認知的意味は「文レベルの参照点マーカー」であり、ガの認知的意味は「節レベルの *trajector* マーカー」もしくは「文レベルのターゲットマーカー」である。¹⁴

(12) 八: **sentence** レベルの **Reference Point** マーカー

ガ: **clause** レベルの **trajector** マーカー

: **sentence** レベルの **Target** マーカー

尾谷(1999)

例えば三上(1960)が取り上げている(13)のような文では「象は」が参照点になっており、そのターゲットは後続する「鼻が長い」という節全体である。また、その節内部の構造は、「鼻が」が節レベルの *tr.* であり、「長い」はそれに対する述部である。

(13) 象は鼻が長い。

([Rは[*tr.*が *pred.*]])

このような二重主語構文では、連続して生起する2つの名詞句は<全体 部分>(山田1936)や、<役割 値>(坂原1990)の関係になると指摘されているが、そのような個別事例を散発的に列挙するだけでは八とガの本質を捉えたことにはならない。それらの意味関係は全て<参照点 ターゲット>というスキーマ意味から具現化されたプロトタイプ事例なのである。本稿で提案する認知レベルからの分析方法は、以前から問題視されてきた(14)のような例文についても自然な説明を可能にする。

(14) a. 春はあけぼの。

b. 僕はウナギだ。

この文では「僕」や「春」が参照点となり、その参照点から連想されるターゲットが「ウナギ」や「あけぼの」となる。ただし、むやみに何でも連想されるというわけではなく、その場の状況やコンテキストに依存した発話である。

ガ格のスキーマの意味が「節レベルの *tr.* マーカー」である良い事例として現象文と呼ばれるものがある。これは、眼前の事態をリアルタイムで描写していることを表す文であるが、この文の主語は必ずガでマークされ、八は使用できないとされている。

(15) a. あれっ、雨が降ってきた！

b. *あれっ、雨は降ってきた！

これは、眼前の状況の中で一番際だって認識される tr.として「雨」が選択された結果であり、描写の対象が眼前にハッキリと存在する状況で発話されるため、参照点は必要としないのである。多少奇妙になるが、強いて参照点を言語化するとすれば、それは発話時の状況そのもの（もしくは setting）であるから、以下のようになるであろう。¹⁵

(16) {今の状況はといえば / ここは} 雨が降ってきた。

この文では「今の状況といえば」が参照点になっており、そこから想起されるターゲットは「雨が降っている」という事態である。そしてその事態の中で一番の際立ちを置いて認知されている対象（つまり tr.のこと）が「雨」なのである。このような問題を説明するために、「ハ = 旧情報」、「ガ = 新情報」で捉えようとした研究もあるが、それがハとガの本質とはいえない。参照点として選ばれやすいのの代表例が <旧情報> であり、事態を描写する時は <新情報> である部分が最も際立って認知されやすい（つまり tr. もしくはターゲットとして選ばれやすい）というだけなのである。つまり、新情報 / 旧情報という意味特徴も、ハとガのスキーマ意味から具体化されたプロトタイプの意味の一例として位置付けられるものなのである。これを表にまとめると以下のようになる。

	ハ	ガ
スキーマ意味	参照点	ターゲット / trajector
プロトタイプ意味	旧情報, 全体, 役割 etc....	新情報, 部分, 値 etc...

表 1

ハのスキーマ意味は参照点をマークすることであり、その参照点には <旧情報> や <全体> や <役割> といったものが選ばれやすいだけなのである。また、<新情報> や <部分> や <値> といったものが、最も際立って認知されやすいので、それらが tr. やターゲットとして選ばれることが多いのである。<ハ ガ> の意味として先行研究では <旧情報 新情報> , <全体 部分> , <役割 値> などの表現で記述されてきたが、それらの意味は全て <参照点 trajector / ターゲット> というスキーマ意味から具現化されたプロトタイプ事例を列挙していただいただけだったのである。ハとガが使用される文脈や統語構造によって、ある時は <旧情報 新情報> という原理に基づいて見えることもあれば、ある時は <全体 部分> という意味関係に基づいて使用されているように見えることもあるかもしれないが、それらの根底に共通しているスキーマ意味は、(12) や表 1 で述べた通りである。

3.2. 対象のガ格は主語なのか？

前節では、ガ格のスキーマの意味が「節レベルの tr. マーカー」もしくは「文レベルのターゲットマーカー」であることを見たが、本節では、柴谷(1978)などが論じている文法関係レベルや意味格レベルの視点による分析を、認知レベルから捉え直すことを提案

する。結論を先に述べておくと、いわゆる意味格（動作主，被動作主，etc.）や文法関係（主語，目的語，etc.）による記述は，プロトタイプの事例を列挙しているだけであり，たとえば主語や動作主などという概念は，格助詞「が」のスキーマ意味とは呼べず，具体化された事例の1つにすぎないと主張する。Langacker(1987:217)は，主語/目的語と tr./lm.について以下のように述べている。

“The notions subject and object prove to be special cases of trajector and landmark respectively, but separate terms are needed for the general cases if confusion is to be avoided.” (Langacker1987: 217)

つまり，<主語>や<目的語>という概念は，それぞれ tr.と lm.が言語化された場合の一例であるということである。例えば「太郎が次郎を殴る」という客観的な事態においては，以下のように2通りの言語化が可能である。

(17) 太郎が次郎を殴った。

(18) 次郎が太郎に殴られた。

どちらも客観的な意味は全く同等である。文法関係レベルでの分析では，おそらくどちらのガ格も<主語>と記述されるのであろうが，<主語>の定義が曖昧であり循環論に陥ってしまうことは1節でも見た通りである。次に意味格レベルから見ると，(17)では<動作主>の「太郎」がガ格でマークされ，(18)では<被動作主>の「次郎」がガ格でマークされている。とすると，意味格レベルでの分析によれば，ガ格は<動作主>も<被動作主>もマークできるのだと記述するしかないが，そのように可能な解釈を列挙するだけでは十分に説明したとは言い難い上に，(19)のように<動作主>や<被動作主>以外にもガ格の意味格をいくつか設定しなければならなくなる。¹⁶ ガ格の問題を文法関係レベルや意味格レベルのみで説明するには限界があることは明白である。

(19) a. 花が咲いている。 (theme のガ格?)

b. あいつが嫌いだ。 (対象のガ格?)

c. 頭が痛い。 (theme のガ格? , 対象のガ格?)

例文(17)(18)に話しを戻そう。(17)の例文は，「太郎」に際立ち（ないしは焦点）を置いて事態を把握したことが反映された文であり，(18)は「次郎」に際立ちを置いて事態を把握したことが反映された文である。ここで重要なことは，ある状況を認知する際に最も際立って認知されている対象（つまり tr.）が，ガ格によってマークされ，いわゆる<主語>になっている点である。<主語>という概念について，Langacker(1991:554)は以下のように述べている。

“A nominal that elaborates the trajector of a process profiled at the clausal level of organization. Its profile is thus the primary clausal figure.”(Langacker 1991: 554)

<主語>というものは，節という言語形式によって描写されている事態の中で最も際立っていると認知されている参加者のことであり，つまり節レベルの tr.なのである。¹⁷ そして日本語では，3.1.節でも見たように，節レベルの tr.はガ格によってマークされるのである（尾谷 1999）。

さて，ここまでくればもう明らかであろうが，文法関係レベルや意味格レベルでの分

析は、いわゆる可能な解釈をいくつか列挙しただけの記述でしかなく、<主語>や<動作主>といった概念は、<節レベルの tr.>という認知レベルの意味(つまりスキーマ意味)から具現化された一つの事例ということになる。つまり<動作主>のような意味格は、ガ格が担う典型事例の1つに過ぎず、他にも非典型事例としての<theme のガ格>や<対象のガ格>などとグレイディエンスを成して位置付けることが可能である。これをネットワーク図式で表すと以下のようなになるであろう。¹⁸

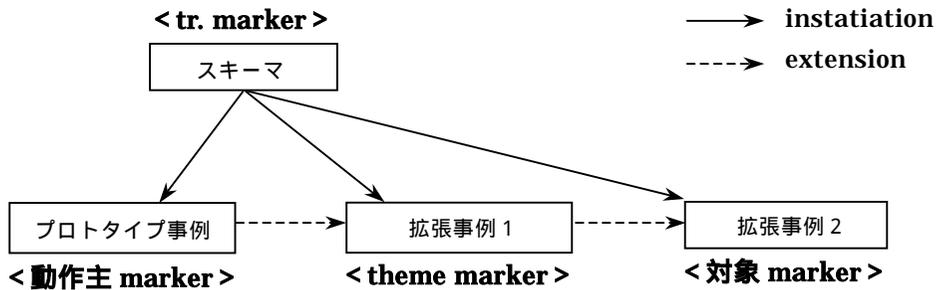


図 3

さて、本節のタイトルである「対象のガ格は主語なのか?」という問いに対する回答について述べよう。ある事態を言語化する際に、認知レベルで最も際立ちを置いて認知されている tr.が、文法関係レベルにおいて<主語>として選ばれるのである。1節で挙げたような統語的特徴を全て満たさなければ<主語>としては認めない、という立場であれば、それは議論の出発点となる<主語>の定義が異なるのだから何を言っても無駄であろうが、そのような分析ではガ格の本質が見失われてしまうということは本稿で見た通りである。ゆえに認知文法のように認知レベルから問いなおす必要が生じるのである。認知文法の考えに従って「節レベルで最も際立って認知されている参与者(つまり tr.)が主語である」と定義するならば、対象のガ格も間違いなく<主語>として扱って構わないことになる。例えば以下の例文を見てもらいたい。

- (20) { 僕は / ?僕が } 背後霊が見える。
- (21) { 僕は / ?僕が } あいつが好きだ。
- (22) { 僕は / ?僕が } ワインが飲みたい。

これらは全て対象のガ格の例文であるが、もしこれらに動作をする主体を付け加えるとすれば、八でマークするのが無標であるのは言うまでもない。< ~ が ~ が > 構文を容認文と判断されるには以下のようなコンテキストが必要である。¹⁹

- (23) A: 背後霊が見えるというのは誰ですか?
B: { ??僕は / 僕が } 背後霊が見えます。
- (24) A: 背後霊が見える人、誰かいませんか?
B: { ??僕は / 僕が } 背後霊が見えます。

このような「誰ですか」という問いかけにおいては、そこが話者の一番の関心事であるから、「誰」が tr.であり、それに対する答えとしての「僕」も tr.ということになる。ゆえ

に「僕」はガでマークされなければならない、ハを用いることが出来ない。当然のことながら、疑問文における「誰」も同様である。このことは、認知の焦点となる参加者がガ格でマークされるという本稿の結論を指示する良い事例となるであろう。

(25) { *誰は / 誰が } 欠席しましたか？

3.3. 際立ちの移行と主観化

最後に、本来ならば行為の対象になるはずの参加者がガ格によってマークされるようになるプロセスについて触れておく。これまで見てきたように、ガ格の機能は最も際立ちの高い参加者をマークすることであり、それは動作の対象よりもむしろ動作の主体である場合が無標である。しかし何らかの理由によって主体の際立ちが失われたり、もしくは意図的に失わせる場合に、動作の対象へと際立ちが移行すると考えられる。つまり無標の事態把握における tr. と Im. を逆転させるプロセスと言ってもよい。このような tr. と Im. の逆転による言語表現は、以下においても見られる。

(26) a. 小さな丘の見えるところにやってきた。

b. 小さな丘が目の前に現れてきた。 山梨 (2000: 68-9)

例文(26a.)は客観的かつ物理的な移動を反映した文であるが、(26b.)では「丘」が移動しているわけではないので、主観的な移動に基づく事態把握が反映された文である。無標の事態把握であれば移動主体(つまり発話者)が tr. になるところであるが、(26b.)では知覚対象の「丘」が tr. として認知されているのである。このように、行為主体よりも行為対象に際立ち(焦点)を移行させて事態を把握するストラテジーは、英語の知覚構文(Fukada1996, Taniguchi1997)や中間構文にも見られる。^{20, 21}

(27) a. He looks happy.

b. The flower smells sweet.

(28) a. The book sells well.

b. The knife cuts easily.

例文(27a.)では、本来ならば主体によって知覚される対象であるはずの人物が節の tr. として、つまり主語として選択されている文であり、(27b.)も同様である。(28)はいわゆる中間構文であるが、どちらも行為主体以外のものが tr. として選択された文である。

対象のガ格が用いられるようになるプロセスも、これと同じと考えられる。以下の例文を見てほしい。

(29) a. 僕が花子を好きだ。

b. 僕は花子を好きだ。

c. (僕は)花子が好きだ。

例文(29a.)は、行為の主体が tr. として、そして行為の対象が主体を位置付けるための Im. として認知されたことを反映している文である。しかし例文(29c.)になると、(29a.)では tr. として認知されていたはずの動作主体が、際立ちを失うことによって潜在的に参照点化してしまっている。それによって、(29a.)では Im. として認知されていた「花子」が tr. としての地位を占めるようになった文である。(29b.)は、行為主体の「僕」が tr. としての地位を失って参照点化してはいるものの、「花子」は依然としてヲ格でマークされたま

まであり、代わりの tr.が選択されていない状態である。ゆえに(29a.)から(29c.)へと移行する中間段階に位置すると考えられる。以上の3つの段階を図示すると以下ようになる。

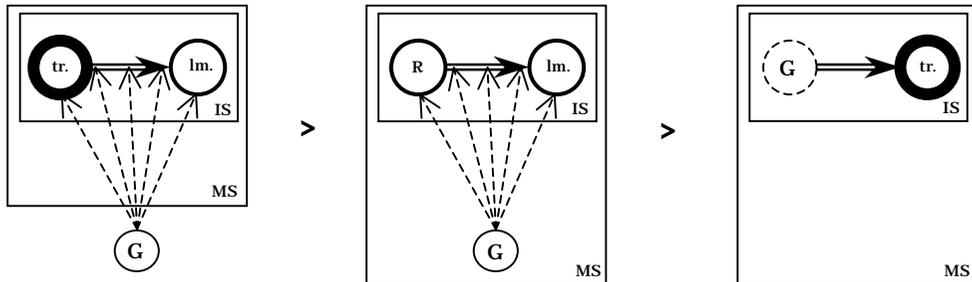


図 4

4. おわりに

以上、本稿においてはいわゆる<対象のガ格>と呼ばれる用法を通じて、格助詞ガの正体について議論した。従来のような意味格や文法関係だけでは、ガ格の本質を十分に捉えることが出来ず、そのようなレベルとは別の認知レベルからの考察が不可欠であると論じてきた。それに従うならば、従来の研究で八とガの意味特徴として指摘されてきた<旧情報/新情報>や<全体/部分>などは、全てプロトタイプの事例の列挙でしかなく、八とガの本質であるスキーマ意味はそれぞれ<参照点マーカー>、<tr./ターゲットマーカー>なのである。このような分析をすることによって、ガ格の多様な意味を統一的に捉えられることを明らかにした。

注

- * 本稿は、第32回白馬夏期言語学会における研究発表に加筆・修正を加えたものである。学会において少なからずご助力を賜った諸氏、諸先生方にこの場を借りてお礼申し上げます。当然の事ながら、本稿での不備は全て筆者の責任である。
- 1 本稿では、日本語の格助詞が case marker に相当すると考える。
 - 2 これら三つの用語は、柴谷(1978)に従って用いる。詳しくは柴谷(1978)を参照。
 - 3 Kuno(1973)は、述語が状態性をおびている時には直接目的語を「が」でマークするという変形規則を提案しているが、例文(6)にも状態性を読みとれることから、やはり不適当な規則と言わざるをえない。
 - 4 具格や原因格の問題について、山梨(1995)は格解釈のゆらぎという視点から「認知格モデル」を提案している。
 - 5 詳しくは杉本(1986)を参照されたい。
 - 6 当然のことながら、「私の息子は」が目的語から主題化された要素であると見なせば容認文であることは言うまでもない。
 - 7 例えば、受動態文の主語は動作主ではない。

-
- 8 「動作主」といえば通常 AGENT のみを指すが、ここでは行為 / 動作 / 経験をする < 主体 > として、いわゆる ACTOR や EXPERIENCER も含めて用いることにする。
- 9 Croft(to appear)なども論じているように、主語を認定する際に統語テストだけでは信憑性に欠ける。たとえば主語が必ず文頭にあったとしても、文頭にあるものが全て主語とは限らない。どの統語テストを採用するかも研究者自身が恣意的に決定している場合もある。文法概念を文法概念で規定するのは循環論に陥りやすいといえる。
- 10 同じ概念として‘figure’と ‘ground’ がある。詳しくは Talmy (1978)を参照のこと。
- 11 ゆえに、旧情報（共有情報）が参照点として選ばれやすい。
- 12 日本語の格助詞「の」についての同様の分析は尾谷(1998)を参照。
- 13 スキーマとプロトタイプに基づく言語分析に関しては Langacker(1987)を参照。
- 14 長谷部(2000)においてもガ格が *trajector* をマークするという分析がなされている。
- 15 英語の場合、このような *setting* を表す語は *it* である。
- 16 このような逐次的な記述に徹するなら、動作主の AGENT についても、ACTOR や EXPERIENCER などの下位類を細かく設定する必要性が生じる。
- 17 *tr.*が主語になるのは節レベルのことであるが、句レベルの *tr.*はその句の主要部名詞ということになるであろう。例えば *a lamp above the table* という名詞句においては、*lamp* が *tr.*であり、*table* が *lm.*として機能している。この場合、*table* が参照点で、*lamp* がターゲットになっているが、常に *lm.*が参照点、*tr.*がターゲットに対応するわけではない。
- 18 さらに細かくするならば、当然 ACTOR や EXPERIENCER などこのネットワーク図の中に組み込むことも可能である。
- 19 それでもまだ完全に自然な文とは言い切れない、と筆者には感じられる。ガ格が2つ連続するための文体的な制約であろうか。
- 20 この種の事態認知が反映された典型例が受動文であることは言うまでもない。
- 21 このような考え方を極端に押し進めれば、他動詞から自動詞が派生（ないしは拡張）すると考える立場の研究に、認知論的な説明を与えることも可能である。

参考文献

- Croft, William (to appear) “Logical and Typological Arguments for Radical Construction Grammar.” ms.
- Fukada, Chie. 1996. “On Semantic Extensions of Verbs of Appearance,” *Papers in Linguistic Science*. No.2, pp.63-85. Kyoto University.
- 長谷部陽一郎 2000. 「< ~は~です / ~は~が~です > 構文に関する一試案」, *KLS*, Vol.20, pp.207-217.
- 橋本進吉 1969. 『助詞・助動詞の研究』東京：岩波書店
- 久野 暉 1973. 『日本文法研究』東京：大修館書店
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 1: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1990. *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. 2: Descriptive*

- Application*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1993. "Reference-Point Constructions," *Cognitive Linguistics*. Vol.4, No.1, pp.1-38.
- Langacker, Ronald W. 1998. "On Subjectification and Grammaticalization," Jean-Pierre Koenig (ed.) *Discourse and Cognition: bridging the gap.*, pp.205-218.CSLI Publications.
- 三上 章 1960. 『象は鼻が長い』東京：くろしお出版
- 中村芳久 1997. 「認知的言語分析の核心」, 『金沢大学文学部論集 言語・文学編』, No.17, pp.25-43.
- 中村芳久 1998. 「認知類型論の試み：際立ち vs.参照点」, *KLS.*, Vol.18, pp.252-62.
- 尾谷昌則 1998. 「格助詞「の」の認知プロセス」, 『言語科学論集』, Vol.4, pp.16-33.
- 尾谷昌則 1999. 「ターゲットの選択と参照点の選択　八とガ再考」, 日本英語学会第17回大会ワークショップ『参照点構造をめぐる』発表資料 pp.19-24.
- 坂原 茂 1990. 「役割、ガ・ハ、ウナギ文」, 『認知科学の発展』, Vol.3, pp.29-66. 東京：講談社サイエンティフィック
- 柴田 武 1995. 『日本語はおもしろい』東京：岩波書店
- 柴谷方良 1978. 『日本語の分析』東京：大修館書店
- 杉本 武 1998. 「格助詞」, 『いわゆる日本語助詞の研究』奥津敬一郎(編), pp.227-380. 東京：凡人社
- 鈴木武生 1999. 「同定文におけるNP機能解釈と情報構造に関する日韓対照研究」, 第31回白馬夏期言語学会口頭発表資料.
- Talmy, Leonard 1978. "Figure and Ground in Complex Sentences," In Joseph H. Greenberg, ed., *Universals of Human Language*, vol. 4. *syntax*, pp.625-49. Stanford: Stanford University Press.
- Taniguchi, Kazumi. 1997. "On the Semantics and Development of Copulative Perception Verbs in English: A Cognitive Perspective," *English Linguistics.*, Vol.14, pp270-299.
- 時枝誠記 1950. 『日本文法 口語編』東京：岩波全書
- 山田孝雄 1936. 『日本文法学概論』東京：宝文館
- 山梨正明 1995. 『認知文法論』東京：ひつじ書房
- 山梨正明 2000. 『認知言語学原理』東京：くろしお出版